

ナポレオン・ボナパルトはただ一片の武人のみでなかったといわれるが、物理学の歴史のなかでも彼が学問をすすめたり、学者を優遇したとかいう事実にくつも出くわすはずである。イタリアのヴォルタが電池を発明したのは人の知るところであるが、彼は一八〇〇年パリに赴き、十一月十六日、十八日、二十日にわたりフランス・インスチテュートにおいて講義を行った。ナポレオンは右の会員として、この二日間の講演に臨み、親しく水の電気分解の実験を見たのである。

この発明を記念するため金メダルを作つて贈ることを命じ、さらにこの実験をもつと大仕かけに行うための委員会を聞かせた。この委員会には著名な人ではピオ、クロウム、モンジュなどがいた。また、ヴォルタにはレジオン・ドヌール賞を贈り、その上金六千フランを下し置かれ、後にロンパルディア国の元老院議員たる名誉を与えた。

一八〇〇年といえば、その五月にはサン・ベルナルド越えを企てた年であり、マレンゴの戦い、ホオエンリンデンの戦いもこの年である。ヴォルタはイタリア政府の許可を得てパリに赴いたという。

電池の発明には余程興味をおぼえたと思えて、これに関係したことがまだある。同じ年にイギリス人クルクシャンクは電池を改良して強力なものを作つたが、ナポレオンはこの方法で強い電池を作らせ、これをエコオル・ポリテクニクに贈つた。ゲーリユサクなどが実験に使つたという。

またフランクリンやヴォルタに匹敵するような電気の研究を行った人に贈る賞というのを設けた。これは電気化学の開拓者デーヴィーが「電気の化学作用」という研究のため、一八〇六年にもらつた。

ウィッテンベルクの人クラードニは板の上に砂を載せてその振動を研究し、いわゆる「クラードニの図」といわれるが、この図をやはりフランス・インスチテュートで行つて見せた。ラプラスその他の会員に非常な興味を与えたという。ナポレオンは、これをチエイルリ宮殿で再び行わせ親しく見、ヴォルタのときと同様金六千フランを贈つた。その著書『音響学』をフランス語に訳させるためである。

そのほかでは、ガリレイの遺稿を集めさせたこと、等々である。

ナポレオンはこれらの新知識に、無邪気な向学の心を寄せたものが、人心収攬のためにやったのか、または電気を戦争に使うと思つたのか、それはわからない。しかし、ドラマチックな英雄の生涯のうちに、つつましく学者の講義に耳を

傾けていた日もあったことは、なんとなく愉快である。それには別に風雲も要らなかつたし、そのときのまなざしは、モスクワの火を見て歯を食いしばったときに比べて、想像もつかないほど平和と清澄に輝いていたにちがいない。セント・ヘレナの夢に、ヴォルタの顔も一度くらいは浮かんだことであろう。

#### アルキメデスの墓じるし

アルキメデスといえばギリシアの数学者と断らなくても、あの湯殿から飛び出して「エウレエカ、エウレエカ」(解った、解った、というギリシア語)を叫んだ人かというので知られている。この幾何学者 - 一般には幾何学者としてよりもいろいろの発明などで有名であるが彼はそういうことに少しも重きを置いていなかった。石弓を工夫して敵を防いだとか、滑車を使って大きな船を引張ったなどという少年向きの話などは彼にとっては苦々しいことかもしれない。墓じるしというのは丁度その研究のように独創的である。

それは円柱に球が内接している図を描いて、そこへこの円柱と球の体積の比が $\omega$ と $\omega$ とであるという文句を刻んだもので、友人や身内のものに遺言してこう作らせたのだという。この円柱に内接する球の問題は、彼の研究の一つで、この証明をみずからいかに重く見ていたか想像できる。

この墓じるしが、いばらや雑草に埋もれているのを見出したのはキケロで、キケロがシシリイで会計官をしている時分にジルジエンチの片はとりでこれを見つけた(西暦前七五年)。アルキメデスはシシリイの東海岸シラクサの人で、シラクサがマルケルスの率いるローマの軍隊に攻められたとき殺されたのである。兵士が捕らえに来たとき、アルキメデスは砂の上に図を描いて幾何学のある問題を考えていたので、これを解く間待ってくれといったが、兵士は剣を抜いて斬ってしまったともいわれるし、また兵士にむかって「おい君、僕の図の邪魔をしないでくれ」といったとも伝えられる。

キケロはこの墓を見出してこういった。「もしこのローマ人が見つけたさなかつたならば、かつてはもつとも学問のひらけていたギリシアの、一人のすぐれた市民の墓も永久に知られずじまつたであろう」と。その墓石がどうなったか今日知る由もないが、この言をなしたキケロの墓も今は物語のなかに一つのあわれをとどめている。それは「即興詩人」の一節である。「げにも口オマとナポリの間ほど、劫掠に便よきところはあらざるべし。奥の知られぬオリウの蒼林、所々に開ける自然の洞窟より、昔語りの一目の巨人が築きぬという長壁のなごりまで、いずれか身を隠し人をうかがうに宣しからざる。友は蔓羅の底に埋もれたる一帯の石を指さしてキケロの墓を見よといえり。これ無惨なる刺客の剣の口オ

マ第一の弁士の舌を黙せしめし所なりき。」

(ナポレオンに関する原稿は昭和四年二月五、六日の東京朝日新聞に、また、アルキメデスに関する原稿は同紙十二月六、七日に掲載されたものである。人名の表記は現代風にしたものがあるがナポレオンの記事のなかのクロウムは原文のままでクーロンであろうか。(K))